
素顔

佐倉純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素顔

【Nコード】

N1403G

【作者名】

佐倉純

【あらすじ】

少し前の、高校生達のさわやかな交流を描きました。

その人を初めて目にしたのは、その年のクラス発表が終わって、自分の教室に入った、まさにその時だった。

その人は、教室の一番前の席のあたりで、何人かの友達と話をしていたようだった。

だが、私には、そんなまわりのことなんて何一つ見えていなかった。

その人はそれほどに素敵な人だった。

（あれが運命的な出会いというものかしら……）

と、私は、ずっと後々になって、その時のことを考えた。

のちのちに彼の良さが見えてくるようにはなるものの、まだその時は、私の目には派手好きな、だけど強く見た者に印象を与える青年であった。

だが、私は、最初は彼のことを毛嫌いしていた。

彼は容姿は美しかったから、クラスの中でも大半の女生徒が入れ込んでいたし、彼の周りには、常に近寄れないくらいの取り巻きがあった。

だから私みたいに静かな事を好む女から見れば

（一体、何をちゃらちゃらして、浮かれているんだか）

という軽い軽蔑を、むしろ彼には感じていたのだ。

もう少し嫌な言い方をすれば、

（あんな尻の軽そうな女性とに囲まれて喜んで……）
という思いもあった。

それにあの人も、クラスの中で、地味で存在感のない女の一人など、眼中になかっただろうから……。

（私には、一生縁もゆかりも無い人……）

その程度が、私がその人に持っていた、最初の感想だった。

「今日も話したんだよ、彼って本当に話上手みたいね」

昼休み、友人の里佳が、少し上気した表情で、本を読んでいる私の側に来て言う。彼女も、あの人の魅力に惑わされて、まわりついている人間の一人だ。

里佳からいろいろ聞かされるのは、これで何度の事になるだろうか？

入学式以来の長い仲だし、一番の親友と言ってもいい。

そういう鼻屑目を除いて見たとしても、気立てのいい彼女だが（実際、彼女に近づきたい為に、何人かの男に私が声をかけられた事がある）軽はずみにいろんな男子生徒に入れ込む、この性格だけはなんとかならないの？と私は思う事がある。

そんな彼女の側面を知らない男の子達は、いつも活発な子と思っ
ているみたいだけど、私から見たら、単に軽いだけにしか見えない。
「えらく、入れ込んでいるのね？」

私は、少し冷やかに言った。彼女が新たな崇拜者を見つけた
びに言ってきた、いわば私の常套句だ。

それを、彼女はいつも「あははは、いいじゃないの」と軽くない
すだった。

いや、その時は、私はいつもの調子で言っただけだったけど、
彼女はその言葉に何かを感じ取ったのだろうか？ふっと暗い表情を
見せると、私に言った。

「……冷たい言い方だね……」

そういうと、彼女は私の側を離れた。私には、わからなかった……。

それから、里佳と私は特に表面的には何も無かったけど、少な
くとも私は、彼女に何かしら、罪悪感のようなものを感じていた。

そんなある時のことだった。学校の帰り際、いつも一緒に学校が

ら帰っている里佳が、

「今日は、ちよつと用事があるから」

と言つて、私に先に帰るように言つた。

「たいした用事じゃ無いなら、待つてるけど」私は言う。なんとなく、そう言い出すしか仕方がなかった。

でも、彼女は「いいよ」と軽く拒否した。

「帰るといつても、近くの駅までだし、駅からは別々の電車に乗るのだから……」

だから待つほどじゃないよ、という意味で彼女は言つたらしい。

その時になつて、彼女の言いたかつた事がなんとなくわかつたので、私は彼女の申し出を承諾した。

帰りの電車の中で、私はふと、寂しくなつた。

その翌日、学校で私に会つと、彼女は私を学校の屋上に誘つた。

まだ、屋上は風がきつい季節だつた。

「どうして、こんなところに呼び出すの？」

私は、聞かずにいられなかつた。

「別に屋上に意味は無いんだけどね……」

彼女は言う。そして、虚ろな表情のまま、階下を眺める。なんとなく齒切れが悪い。明るいのが身上の彼女にしては珍しい。

私は、彼女の隣で、次の言葉を待つた。言い出すにも何も言い出せず、また、言い出す機会でもないと思つていたから。

不意に、彼女の右目から、涙が落ちた。

「私の泣いた顔見るのは……一人でもいいからね」

そついうと、彼女は私の胸の中で泣き出した。

彼女は、私に、失恋をしたことを告げたのだつた。その相手の名前までは聞くまでもなかつた。

彼女のために、私もまた泣き出しそうだつた。

そんなことがあつてから、数日間、私はその時のことばかりを考えた。

里佳は、彼に自分の思いを告げたところ、一言、「君は、俺のどこが好きなんだ？」と聞いたそうだ。

その返答に彼女はとっさに答えられず、

「いろいろあつて、一言では言い切れないよ」と、言ったら、その返事が気に入らなかったのか、彼女はふられてしまったという事だった。

彼女は、彼のことを「それだけで、断るなんて……」と、あきらめきれないように何度も言っていた。

確かに、冷たいようには見えた。

それからしばらく後のことだった。

学校からの帰り、少し混んだ電車の中で、いちやつく高校生を白々しい表情で眺めながら、恋愛小説を読むのが、その頃の私の日課だった。

小説の中の恋愛の姿が高尚だという気はないが、さりとして、公衆で羞恥のかけらもないさまを見せ付けるよりは、この方が清楚な気はする。

その日も、電車に乗り込んで、小説をかばんから取り出そうとしたとき、不意に、例の「彼」から声をかけられたのだった。

刹那に、私はどう反応していいかわからなかった。複雑な思いが一瞬頭をよぎる。

「家、こつちだったの？」

彼は、柔らかい口調で尋ねる。見た目も麗しいが、口調も滑らかだ。

ふと、心を失いそうになった。

「あの……私に何か？」

私は、なんとかそう口にした。

その口調がいぶかしく映ったのだろうか？

「なんか、警戒してるように見えるなあ」

「そんなこと……」

「ないです……」という口調で答えたが、実はそんなことあったのだ。何故、今、私に声をかけたのか？なぜ、里佳を……。私が言いたいことはたくさんあったはずだった。

「ところで、君だけだね？僕に声かけないのは」

彼のいう事が一瞬わからなくて、私は、戸惑った。その言い回しのなんと気障な言い回しなのかしら……。とは、あとになって思った印象である。

「……私から人に話かけるのが苦手なので……」

「ふーん……」

彼は、私の若干紅潮した顔を興味なげに見ながら、そんな返事をする。からかわれているようだ。心の中に、この場から逃げ出したい気持ちがよぎる。

「いつも、本読んでるんだね。好きなの？」

「……」

私は何も言えなかった。どう答えたらいいのか、咄嗟に思い付かなかった。いつも本なんか読んで暗いと思われているのだろうか？「まあ……好きな事を、自由にやれるというのは、いい事だとは思うけど……」

その言葉で、私は少しはつとすることがあった。一体何が言いたいんだろ？私は、彼の表情をちらと眺めた。なんとなく、堅い表情だった。

この人でも緊張することなんてあるのだろうか？と思う。

「ところで……」

と、不意に、彼が私に視線を戻して言う。

「何でしょう……？」

「うーん……今日じゃなくていいけど、いつか時間いただけなのかな？」

少し遠慮がちに、困ったような表情を見せながら、彼が言った。

（どうしたものかしら……）

電車の中で、一人、私はぼんやりと外の景色を見ながら考えた。もう、彼は途中の駅で降りて、私は電車に残されている。

「相談というか、聞いて欲しい事があるんだけど」

そう言われたとき、私の胸は確かに高鳴った。いつも読んでいる恋愛小説ではないが、私も恋に憧れがないでもない。

まさか、あの彼が私に……。

（そんなこと……あるはずないよね……）

そう、私は考える。そうだ。「そんなこと」が間違ってもあるうはずがない。それに「そんなこと」になれば、里佳にどう接すればいいのか……。

結局のところ、いくら考えても、私の答えは出ないのだった。

その彼の相談というのは、電車の中でのことがあってから、1週間経った、その放課後だった。

その日の昼休み、私は里佳と昼食を済ませたあと、図書室に本を返却に行こうと、教室を出た、その時だった。

彼がその時を見計らったように、私に声をかけてきて「放課後に、時間がもらえないかな？」と言ってきた。

さすがに里佳のいるところでは何も言ってこなかったところをみると、私に気を遣ったのかもしれない。

放課後、私は、彼の言う通りに、屋上に向かった。あの、里佳が私にすがって泣いた場所だ。

まだ、あの時の風景が心の中に残っているぶん、ここに来る事自体心苦しい。私が屋上に上がると、彼の方が先に来ていた。意外な感じがした。

「来てくれて、ありがとう」 そう言って彼は軽く笑った。

少し、私は心が動揺するのを覚えた。そんなことされたら、その時、私は、彼に言わないと、と心に決めていた事を危つく忘

れそうになった。

そして、私は、彼と話をすることが決まっていたことを、まず思い切って口にする。

「あの……なぜ、里佳を……？」

そう、私は尋ねて見た。彼が怒るのでは？と、すごく怖い思いをした。

「あれは……」

そう言っ、彼は、視点を私から変えて、つぶやく。言いにくい理由でもあるのかしら……。

「どこが好きか理由のわからない人に、軽はずみな返事はできないから……」

「でも……」

「君は、人を好きになってから、理由を探すの？」

「……」

そう言われては、私は何も言い返せなかった。否、咄嗟に言い返す言葉が無かった。

「……人気があるというのは、人気が無いのより辛い場合もあるもんだよ……」

彼は、ふとそんなことを言った。

「あの子は……里佳さんと言ったかなあ……。僕の人気に恋をしているみたいだった……」

私は、彼の言う事を黙って聞いていた。

里佳のことは多分、私が一番よく知っている。

だから、彼が彼女のことをどう評価するか、それを聞いてみたかった。

「人気に？」

「僕の事を話上手って言っ、てたみたいだけど……」

私は、その時になって、以前に里佳が言っ、ていた事を思い出した。「あ、人気に恋してると言っ、つのは変か……。そのなんて言っ、かなあ……」

「偶像……」

「あ、そうか……偶像か……」

彼は、私の言葉を反芻する。

「まわりから作られた像に恋をしてる、っていうのかな？ともかく、彼女が僕に対して、偏見と言つか……」

「……」

なるほど……と、私は考えた。

結局のところ、彼自身も、彼のまわりにまわりつく人気に振り回されていたのだ。

私は里佳の側面ばかりを見切っていることで、今回の事を考えていたけど、彼の側面についてまでは考えていなかった。

私は私で反省せざるを得なかった。

思わず声を出して、私は嘲笑いそうになった。

「そういう偏見や像で見られると、結局そう振る舞わざるを得なくなる。辛いよ。どれだけ、自分の心のままに動けたらいいか……結局、これは今日、僕が君に相談したかった事でもあるんだけど……」

「私に？」

自分のことで一杯だっただけに、彼からの相談が主題だったことを完全に忘れていた。

「あ、ごめんなさい……」

「いや、いいよ。答えがなんとなく出た気がするから……」

そう言っただけ彼は微笑みながら軽く手を振った。

彼がどういう形で答えを得たのかわからないし、私からどんな答えを得ようとしたのかわからない。

だけど、彼の表情がすでに答えを得たものであるのは明らかだった。

風がすつと通りぬける中で見たすがすがしい表情の彼は、
クラスの誰もが見た事もない、なんともいえず美しい素顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403g/>

素顔

2010年10月8日15時43分発行